

第Ⅳ分野 第14分科会

人権文化の創造

司会者 廣居 克彦 藤原 雅俊

記録者 川崎 眞由美 大畑 智佳子

報告者Ⅰ 西影 裕一(西播磨)

人権文化が根づいたさまざまな活動をと
おして地域の絆を深め、住みよい町づくり
を行う

報告者Ⅱ 丹後 政俊(丹波)

冒険教育を通して人権を大切にすまち
づくりを進める～楽しみながら自他を大切
にする人間関係のヒントに気づく～

報告者Ⅲ 山下 美鶴(但馬)

地区巡回学習会の歴史と成果について

1 研究討議の概要

＜報告Ⅰについて＞

司会 人権文化が根づいたさまざまな活動をとおして、地域の絆を深め住みよい町づくりを行う取組について、どんなことを思われているか。

報告者Ⅰ 先日、近所の独居老人を気にして公民館に連絡を頂いた。何うと熱中症で亡くなっていた。その老人は、日頃から地域付き合いを大切にされていたからこそ、地域から連絡を頂き気付いてもらうことができた。

参加者 高齢者の割合はどれくらいか。

報告者Ⅰ 人口250人中70歳台の方が43人、隣の町では半数以上が70歳台である。

司会 街づくり、地域づくりをどのように進めておられるか。

参加者 かつては賑わっていた地域だが、現在は全校児童39人という少子高齢化の地域である。秋と春にある祭りの伝統の獅子舞を、3地区が持ち回りで担当している。練習期間の確保、獅子舞の指導者の必要性、若い人の減少、更に、保存会を立ち上げることの難しさから、祭りの継続も難しくなってきた。しかし、伝統を大事にしながら、時代に合わせて変えていくことも必要ではないかと、地域の意識も変わってき

た。例えば、昔は男の子だけでしていただんじりや獅子舞を女の子にもさせること、日付を固定せず、土日に合わせてすることの2つの改革を経て祭りを続けていくことができた。今後も、2回ある祭りのうち、秋だけ獅子舞をする等、残さなければならぬところだけは残すようにしていこうとしている。他にも女性が土俵場上がることは「もってのほか」という時代を経て、5年くらい前から女の子が相撲をとるようになった。これらがきっかけになって、昔の男女差別を考え直すことができ、住民の意識が変わってきている。

司会 自治会の取り組みの中で意識改革をされてきたお話だった。報告者Ⅰの地区は人口の多い地区、今の発言は少子高齢化が進む地域からのお話だった。

参加者 自治体の組織をどのように作られているのかについて、また、ホタルの取組について詳しく教えてほしい。

報告者Ⅰ 組織は、会長、副会長…等、一般的なものである。いろいろな取組をとおして絆を深めていくのが一番大事だと思って取り組んでいる。ホタルの取組については、環境等の条件によって上手くいったりいかなかったりするが、一度絶やすと復活させるのが難しいので、大変な思いをしている。自然にホタルが発生するところがうらやましい。

司会 それぞれの地域での工夫や取組について更に交流したい。

参加者 高齢者が多いので仕方ない面もあるが、地域の取組に無関心という課題がある。地域の交流のために祭り、グランドゴルフ、ピザパーティー等しているが、その時だけにとどまってしまう。参加者も、来てほしい地元からは少なく、少し離れた地域からが多い。戸数が少なく、全員が役員になる時がくる。隣の地区では3人で役を回している。

司会 少子高齢化の実情の中、地域を存続させることが大変な状況もあるようだ。悩みなど交流し合いたい。

参加者 子ども会会長をしている。新しく住民になった方から、子ども会に入らないといけないのかという質問をされる。子ども会に入らないと登校班に加われなく、保護者が学校まで送り迎えをしている家がある。子ども会に入るか否かのような悩みのある地区も他に

あるか。

参加者 自治会に入っている人もいなくても、地域との付き合いは変わらず、生活に不自由はないので、入らない方が楽、煩わしいことから逃げたいという思いで脱会する人がある。

報告者Ⅰ 子ども会に入っているのは3分の1の家庭だが、入ってなくても一緒に登校している。先ほどの発言に驚いた。

参加者 抜け得にならないようにしたいものだ。小学校と地域との連携をとることが必要である。地域には子どもの声が必要である。子どもは地域の宝である。行事にも参加させたい。

<報告Ⅱについて>

報告者Ⅱ (参加者全員に「ガッチャ」の体験を提案)

報告者Ⅱ みんなができたことをみんなで拍手して喜び合うことのよさを感じたい。私はこの体験をして、勝ちにこだわり、競争的過ぎる自分に気づけた。自分の気づきを大切にすることを重心している。

司会 アイスブレイクをしていただいて意見も出やすくなった

参加者 取組の写真にこの取組について詳しく教えてほしい。

報告者Ⅱ 寝転んでいて人に一つ一つ具体的な指令を出し起き上がらせるコミュニケーション活動と、空き缶の中にポップコーンの種を入れてはじかせた「春ピク」の様子を紹介した。

報告者Ⅱ 何でも冒険、手を挙げて発言するのも冒険である。そういうチャレンジが自分を深める。

参加者 地域の人権教育というと固くなるが、雰囲気をはらげるネタを教えてください。

報告者Ⅱ (ゲームを紹介する。)

- ① 左手で握手をして右手でジャンケン。勝ったらつかないで自分の掌をたたき、負けた人はたたかれないように防ぐ。
- ② 向き合って座り、左手を相手の膝に。ジャンケンに勝ったら自分の手をたたき。負けた人はたたかれないように手をよける。逃げられたら自分の膝をたたきことに。
- ③ イースター島のモアイ像になり、その場でぐるぐる

回って夕暮れと言われたらしゃがむ。自分でどの方角を向くか決めて待つ。「夜明け」と言われたら自分で決めた方向を向いて「ウォー」と言う。全員同じ方角を向いたら成功(4回目に全員の方角が一致し、みんなで喜ぶ。)笑顔が一番。

報告者Ⅱ 群れで育つ生物は、子孫を残すために周りが気になり比べてしまう本質があるので、差別がない。他者と比べて自分が優位にあることで満足してしまうが、そのような優劣をなくし、人種や職種等を越えて、凝り固まった考え方、偏見をなくしたい。

参加者 地域で人権をテーマに啓発、交流を進めている。その中で自由に発言でき、「今日は参加してよかった。」と思ってもらえるように工夫している。今日習ったことを持ち帰り交流の初めに取り入れたい。

報告者Ⅱ 「来てよかった。」「また来たい。」と思ってもらえるよう工夫することが大事である。学校に勤めていた頃は、子どもたちは来て当たり前だったが、こういう仕事をしてからは、また呼んでくれるかどうか勝負になる。改めて今の発言を聞いて感じた。

司会 1本目は、地域づくりについて 2本目は固くなりがちな人権学習の手法について深まってきている。

<報告Ⅲについて>

参加者 学習会への参加率を知りたい。また、この取組は、旧朝来町の取組なのか、朝来全体の取組なのか知りたい。

報告者Ⅲ 集落によって参加率は違う。取組は旧朝来町のみの取組である。

参加者 啓発映画 2.~3本となっているが、独自のものか。

報告者Ⅲ 人権啓発のビデオはたくさんの種類があり、交流等の時間を確保するために、20 分前後のものを選んで取り入れている。

参加者 朝来市では、県のDVDをしている。今年は全員(38名)で観て選定している。今年は同和問題、障害者のビデオを選定した。

参加者 姫路市にも校区人権教育がある。ビデオを見た後の交流の仕方が大事だが、その方法は決まっているのか、それとも町で独自の手法か。

報告者Ⅲ 自由に発言してもらっている。ビデオにつ

いてでも、日頃思っていることでもよい。それに理事が答え、みんなで話し合っている。

参加者 ビデオ鑑賞はしているが、意見が出なくて困っている

報告者Ⅲ 会場から意見が出ない時は、理事が自分の経験を話す等工夫をしている。

参加者 報告者Ⅱのアイスブレイクでもあったが、無理強いはいしない。進行は区長がしている。47年続いているからこそ、意見交流がしやすい。

参加者 地区の人権巡回学習により、非常に成果を上げられた発表の中で、2件の人権問題解決を町同教にまかせたと書いてあるが？

報告者Ⅲ 差別事象は、地区内でのものであった。町人教が介入し、自分の言葉で差別について認め、反省文を書いてもらうことをとおして、円満解決をしている。

司会 討議の方にも入っていくが、上手くいっている取組や課題等意見交流をしていきたい。

参加者 朝人教と同様、各地区の都合に合わせて1年かけて地区巡回学習会をしているが、若い方の参加率が低い。これからの時代を担っていく若い方の参加をどのように促しているか、参加しやすい環境の作り方をどのようにしているか。

参加者 今年で24回を迎える朝来人権ふれあいフェスティバルを進める中で、若い方に実行委員になってもらう、たこやきコーナーを子ども会でしてもらう、金管バンドや子どもたちの人権発表会を入れることで敬老会やPTAの参加を集める等の工夫をしている。

参加者 地域の組長を引き受けたことを機に人権学習に参加した。啓発映画が非常に優れていて、内容が非常に分かりやすかった。若者が好む俳優さんの出演等もあり、大学生、高校生の参加があった。取っつきやすい中にも深いものがある。若い人は考えが深い。

参加者 解放運動を過去に盛んにしていた経験があるが、参加者の縛りがなくなると参加しなくなった。今そんな状態であることが課題である。

参加者 小学校区で一括した人権教育と、自治体ごとに開催している人権学習の2パターンがあるが、自治会の取組に子ども会が参加して一緒に映画を観る

等、小学校と自治会が連携する取り組み方もある。

司会 3本のレポートを含めて全体討議に入りたい。地域をあげて組織的に取り組むべきではあるが、輪の中に入りにくかったり入りたくなかったりする内容が出ていたが、自分の地区ではどうか。

参加者 3本目の報告にあったように、朝人教が46年間という歴史の中で、継続されてきたこと、全集落でされていることが素晴らしい。養父市は、歴史的には進めて来られているが、全集落では取り組めてはいない。取り組む集落とそうでない集落が2分化している。自主性に任せるのはいいが、本当にそれでよいかという疑問が残る。朝人教の取組のノウハウに学びたい。私の集落では、区費の集金日があり、一人暮らし方が増えている中、区長はこの日を安否確認の日だという。また、この日に、県のビデオを視聴したり、班に分かれて討議をしたりし、人権学習を進めている。報告Ⅰでも命のことが出てきたが、地域作りをしていくうえで欠かせない。

司会 報告者Ⅱの地域ではどうか。

報告者Ⅱ 2回の人権学習があるが、私が担当した時には、神輿をかつぐ子どもたちに、一人抜けたら重くなるということを投げかけ、一人の大切さに気付かせる等の取組をしている。

参加者 私は被差別部落の出身者で、就職、結婚において差別を受けており、結婚を機に夫は両親と別居した。夫は、現在住んでいる地域と実家とのどちらとも付き合い(役員)をしている。まだこんなにも差別が残っているのかと思う。子ども会に入らなければ登校班に入れないという話があったが、母子家庭等、いろいろな家庭がある状況の中で、配慮が必要ではないか。母が自殺して祖母が育てている家庭も知っている。小さいうちは保護者同伴でないと参加できない状況があり、問題を感じたので、自ら親代わりになって世話をしている。それによって安心して参加できるようになった。子どもは入りたいが、親やその他の事情で入れていないことがある。いろんな状況の家庭があるということを踏まえ、取りこぼしがないように、教育関係者に配慮してほしい。子どもの貧困も大人の責任だと思う。子どもの人権、笑顔は大人の責任である

ことを忘れてはいけない。

報告者Ⅲ 子どもは部落差別、ジェンダー、なんでも学校で教わっている。習ってきたことを、家庭でも子どもが親(大人)にしっかり発信し、はっきり「それは差別だ。」と言う。子どもが「差別はこわい、したら殺す」という人権標語を毎年(3年間)出している。「差別はいけない」と思う子は、「差別はこわい」と思えるのだ。部落差別は日本固有の問題である。部落差別が見えなかったら、他の差別は見えない。部落差別が解決できないのに、他の差別が解消できるはずがない。

参加者 地域19件中3件が阪神から来られた。その方が、自治会の会長をしている。自分たちが選出したのだからと、みんなで協力し、地域を盛り上げている。敬老会の取組も、女性だけがするものだけではない。私の地域では、男性がしている。地域が消滅しないよう協力し合うこと、子どもが増えることを望みたい。

参加者 道徳が教科化され変わってきている時代だが、「思いやり」という言葉は、部落差別問題の中で使われるものではないということを忘れないでほしい。「一人一人の個性や違いを認めて」という意味の「思いやり」はよいが、文章に入れるときは、使い方をよく考えて使うべきである。部落差別は、違いではない。

参加者 常に心に留めていることは、「この会に参加してよかった。」と思えることである。「自らの課題である」ということを一人一人が持てることが大切である。差別の現実には学び、気付かなければ、日本国憲法の「基本的人権の尊重」はない。問題を感じてそこに行き、肌で感じ、自分で考えるべきである。朝が来るから太陽が昇るのではない、太陽が昇るから朝が来るのだ。私たち自らが、人権感覚を高めていかなければならない。子どもたちには、「みんなちがってみんないい」を教えなければならない。3つの報告を聞いて、「自分自身頑張らなければ。」と思った。

2 総括と今後の課題

報告Ⅰは、「この地区に住んでいてよかった」と言っていただけの地域づくりを目指した多種多様な取組であり、まさに私たち全員が望む地域づくりの実践報告であった。

報告Ⅱは、「参加しなければ学びも成長もしない」

という考えのもと、体験を通して学びや気づきを期待し、自己成長によって人権学習に結びつけていくという実践報告であった。

報告Ⅲは 46 年間同和問題の取組を継続させ、人権意識を高め、深め、広げていく実践報告であった。

『人権文化をいかに地域社会で育むか』については、それぞれの行事に「どれだけ多くの人に参加してもらい、裾野を広げられるか」、「どれだけ多くの人に毎回参加してもらい意識を深めてもらえるか」にかかっている。3本の実践報告を受けて、「地域の実情をとらえ、創造性のあるまちづくりとネットワークづくりにどう取り組めば良いか」について討議が深まった。

討議の中で、人権学習をはじめ、様々な行事になかなか参加してもらえない人や無関心な人の存在も課題になった。人権文化を地域に育み、根づかせるには、広がりと深まりが大切であり、そのためには、粘り強く継続していくことが重要である。そして、継続していくことの結果として文化となって根づいていくものであろうという認識に至った。

人権問題は一人一人の意識(強い意志)が重要である。まず、本日参加している我々が地域のリーダーとなり、人権文化が育まれた住みやすい地区づくりをめざして各地域で取組を進めていくことが大切である。